

# メールマガジン「ガゼッタ」まとめ(11)

第 51 号～第 55 号 (2014 年 1 月 15 日～2 月 25 日配信)

配信した「ガゼッタ」No.51-55 のまとめです。書式と一部表記を変更して図版を取り込み、pdf にしました。



ガゼッタ第 51 号をお届けします。

アルベルト・ゼッダ先生 86 歳の誕生日に当たる 1 月 2 日、日本ロッシーニ協会からお祝いメールを差し上げたところ、5 日にお礼の返信をいただきました。5 月に日本に戻り、ロッシーニの友人たちに会うのを楽しみにしているそうです。

本号は昨年発売された世界初録音のオペラ CD から、パヴェージ《マルカントーニオ殿》とジェネラーリ《ブルグントのアデライデ》を紹介します。

2 月 11 日の例会案内はこちら→ <http://societarossiniana.jp/meeting.html>

## ▼パヴェージの歌劇《マルカントーニオ殿》世界初録音！▼

©Stefano Pavesi: Ser Marcantonio

ステーファノ・パヴェージ：歌劇《マルカントーニオ殿》

マッシモ・スパダーノ指揮ブフォルトツハイム南西ドイツ管弦楽団、ボズナニ・バッハ室内合唱団 ロリアーナ・カステッラーノ (A) マルコ・フィリッポ・ロマーノ (Br) マッテオ・ダポリート (B-Br) ティムール・ベクボスノフ (T) ほか  
録音：2011 年 7 月ヴィルトバート Naxos 8.660331-32 (海外盤 CD2 枚組)



ロッシーニの復興に続いて研究者の着手したのがマイナー・オペラの復興です。とりわけ 19 世紀初頭のイタリア・オペラ作曲家はロッシーニの出現で駆逐され、同時代に人気を得た作品もすぐに忘れ去られてしまいました。その結果、多くのオペラが埋もれてしまいましたが、これはぜひ聴きたいと思う作品も少なくありません。昨年春に発売されたパヴェージ作曲《マルカントーニオ殿 (Ser Marcantonio)》もその一つです。

作曲家ステーファノ・パヴェージ (Stefano Pavesi, 1779-1850) はロッシーニより 13 歳年上で、1801 年リヴォルノで初演された《平和 (La pace)》でデビューし、1803 年ヴェネツィアのサン・ベネデット劇場で初演した《やきもち焼きたちへの警告 (Un avvertimento ai gelosi)》の成功で脚光を浴びました。

《マルカントーニオ殿》はロッシーニがデビューした 1810 年の 9 月 26 日にミラーノのスカラ座で初演されたオペラ・ブッフアで、なんと 54 回の上演を達成しました。ロッシーニのスカラ座デビュー作《試金石》はその 2 年後の 1812 年 9 月 26 日に初演され、驚異的な成功を収めました。回数は 53 回で《マルカントーニオ殿》を超えられませんでした。もう一つ興味深いのは、このオペラがドニゼッティ《ドン・バスクワレ》の原作に当たること。ドニゼッティは《マルカントーニオ殿》のアンジェロ・アネッリ台本をジョヴァンニ・ルッフィーニと一緒に脚色して作曲したのです。ですから登場人物の名前が違って、筋書きには共通点が多々あります。その意味でも、ぜひ聴きたいと思っていたのです。

この CD は 2011 年 7 月「ヴィルトバートのロッシーニ」音楽祭上演のライブ録音で、メドーロ役のテノールは「なんじゃそれ」ですが、ヒロインのベッティーナを歌うロリアーナ・カステッラーノが優れたコントラルトです。そしてこれを聴くと、初期のロッシーニ (1812 年頃まで) がこのオペラに学んだことが判ります。旋律や喜劇的語法はもちろん、歌の前奏や伴奏管弦楽の書法も似通っています。仮にこのオペラが 1813 年の作なら、「ロッシーニを模倣した」と言われるでしょう。でも、パヴェージはロッシーニのデビュー前に、26 作目のオペラとしてこれを作曲したのです。だから影響を受けたのはロッシーニの方です。

このオペラは 2000 年 4 月にルーゴのロッシーニ劇場で上演されており、それが復活上演ではないかと思えます。そしてパヴェージの出世作《やきもち焼きたちへの警告》が 2001 年に ROF で (8 月 21 日と 23 日、ペーザロのテアトロ・スペリメンターレ)、《美女たちの勝利、または鉄の心のコッラディーノ (Il trionfo delle belle, ovvero Cuor di Ferro)》(1809 年。ロッシーニ《マティルデ・ディ・シャブラン》と同じ題材!) が 2004 年に ROF (8 月 7 日と 10 日、同前) で上演されるなど、パヴェージはロッシーニ研究者に注目されてきました。筆者はこの二つを観劇し、すごい先駆者がいるものだと感心しました。

「おせちに飽きたらカレー」……いや、ロッシーニに飽きたらパヴェージを聴いてみてください。

## ▼ジェネラーリの歌劇《ブルグントのアデライデ》世界初録音！▼

©Pietro Generali: Adelaide di Borgogna

ピエートロ・ジェネラーリ：歌劇《ブルグントのアデライデ》

フランコ・ビーヴァ指揮ヴェネト州フィラルモニア管弦楽団、ロヴィーゴ市ポリフォニコ合唱団 アンナ・カルボネーラ (S) カタジナ・オトジク (Ms) ジャンルーカ・ボッキーノ (T) ほか

録音：2012年3月ロヴィーゴ Bongiovanni GB2458] (海外盤 CD3 枚組)



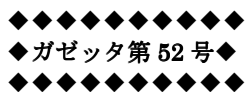
《マルカントーニオ殿》と同時代にイタリアで発売されたのが、ジェネラーリの歌劇《ブルグントのアデライデ》です。ロッシーニのオペラ (1817年) と同じ題名なので驚きました。とはいえ前記パヴェージの「当たり」に対し、こちらは「ハズレ」です。

作曲家ピエートロ・ジェネラーリ (Pietro Generali, 1773-1832) はパヴェージより6歳年上ですが、代表作を問われても「?」。出世作は1804年ヴェネツィアのサン・ベネデット劇場で初演されたファルサ《未婚のパメラ (Pamela nubile)》、1816年のフェニーチェ劇場初演《ローマのバッカス祭 (I baccanali di Roma)》で大成功を収めたと言っても「なんじゃらホイ」ですね。でもロッシーニの先輩とあって1805年初演の《うりふたつの間違い (L'inganni della somiglianza)》が2002年、1810年初演の《アデリーナ (Adelina)》が2003年にROFで上演されています。筆者は観劇しましたが、感心した記憶はありません。

でも《ブルグントのアデライデ》は1819年初演のオペラ・セーリア。ロッシーニの名作がイタリア中で上演されていたので負けじと頑張る……と思っただけにあらさ。随所にロッシーニ風のベルカントが聴かれますが、ユルイとかヌルイとか、ピリッとしないのです。管弦楽パートの薄さも致命的。ロッシーニの影響が濃厚な第2幕アデライデとアダルトの二重唱、コロラトゥーラを駆使するロンド・フィナーレなど、塩・胡椒と上質なオリーブ・オイルをかけないとなっちゃうのか、という見本です。演奏も締まりがなく、指揮者にもセンスが感じられません。

では、なぜこの忘れられたオペラが2012年ロヴィーゴで、193年ぶりに蘇演されたのか? それはこの作品が1819年に同地のソチャーレ劇場こけら落としに作曲初演されたからです。ロヴィーゴにとって歴史的な意義がある、というわけ。でも復活上演なら、もっと優れた歌手、指揮者、管弦楽と合唱団で最高の演奏をしなければいけません。でないとジェネラーリが再評価されず、オペラも再び埋もれてしまうでしょう。ともあれ、関心のある方はご試聴ください。

(2014年1月15日 水谷彰良)



#### ◆ガゼッタ第52号◆

ガゼッタ第52号をお届けします。

本号は、「クラウド・アップロードの訃報」、「ベルリン新空港の開港延期と《エアロッシーニ》」、「世界の主なロッシーニ上演、2014年1~3月」をお届けします。

2月11日の例会案内はこちら→ <http://societarossiniana.jp/meeting.html>

#### ▼クラウド・アップロードの訃報▼

1月20日、名指揮者クラウド・アップロードがボローニャの自宅で亡くなりました。80歳。昨年の来日予定が健康上の理由でキャンセルされ心配でしたが、まことに残念です。

ロッシーニ指揮者としてのアップロードと聞いてすぐ思い出されるのがゼッタ校訂版をいち早く使用した《セビーリャの理髪師》と《ラ・チェネレントラ》の録音、そして記念碑的な《ランスへの旅》蘇演と各国再演です…1989年の《ランスへの旅》日本初演もそうでした。その意味でもロッシーニ復興に大きな貢献を果たしました。心からご冥福をお祈り申し上げます。

#### ▼ベルリン新空港の開港延期と《エアロッシーニ》▼

ベルリンにある、シェネフェルト、テーゲル、テンペルホーフの三空港を統合してブランデンブルク国際空港ができるという話は以前からありましたが、開港予定は毎年延期されています。今年1月には「年内中の開港は無理」と正式発表されました。

そんなすったもんだと絡んだお話ですが、昨年予定された新空港開港を見越して《エアロッシーニ (Airossini)》が作られたと聞きました。え、そんな航空会社ができるの? と思っただけに大間違い。

これは新空港誕生に合わせてノイケルン・オーバーが制作した《ランスへの旅》のパロディで、昨年6月に初演されています。時を2013年に移し、ドイツのメルケル首相やアメリカのオバマ大統領など各国首脳が国際会議のためベルリンの新空港に集まって大騒ぎ……とのようです。↓写真付きサイトを見つけました。

<http://www.one80hostels.com/en/events/saturday-aug-24-2013>

今年1~2月にも再演され、日本人のソプラノ、柳原由香さんも出演します (詳細下記)。



つもなく面白かったそうです。CG や映像を駆使した無類に楽しい演出。まだご存じない方は、DVD (2007 年 1 月パリ・シャトレ座ライブ。Naive V5089 海外盤。日本語字幕無し) をご覧ください。

本号は、「新譜：コルブラン歌曲集」、「新譜：藤原歌劇団のロッシェニ CD」をお届けします。

2 月 11 日の例会案内はこちら→<http://societarossiniana.jp/meeting.html>

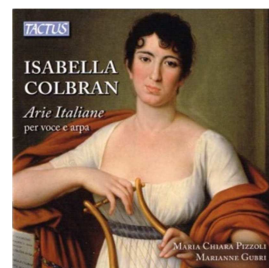
## ▼新譜：コルブラン歌曲集▼

### ◎Isabella Colbran: Arie Italiane

イザベッラ・コルブラン：イタリアのアリア集（「六つのイタリアの小アリア」全 4 集ほか、全 27 曲）

マリーア・キアラ・ピッツオリ (S)、マリアンネ・グブリ (Harp)

録音：2013 年 7 月ボローニャ Tactus TC780302



イザベッラ・コルブラン (Isabella Colbran, 1784-1845) って誰？なんて人はロッシェニ・ファンとは言えません。なぜならロッシェニは《イングランド女王エリザベッタ》《オテッロ》《アルミダ》《湖の女》《セミラーミデ》など 10 作のオペラ・セーリアをコルブランを主演に作曲し、妻に迎えたからです。

カストラートのクレシェンティーニに師事したコルブランが、デビュー前にコンサート歌手として活動するかたわらイタリアのアリアと称する 4 種の歌曲集を作曲して 1805~9 年に出版したことも知る人ぞ知る、です。筆者は 2007 年にこれに関する研究発表を日本音楽学会第 58 回全国大会(シンポジウム 5『創造する女性たち』)で行い、文書化したそれも日本ロッシェニ協会ホームページに掲載済みです(『女性音楽家研究における「女性歌手」の所在 コルブランとサンティ=ダモローを例に』)。PDF 版はこちら→ <http://societarossiniana.jp/ongakugakkai2007.pdf>

そこではコルブラン作品のエディションについて明らかにし、20 世紀に出版された楽譜も網羅しましたが、残念ながら録音は数曲のみでした。今回発売された CD は 4 種の歌曲集全 24 曲の世界初録音であるとともに、他に 3 曲収録して事実上のコルブラン作品全集となっています。その意味で快挙と言って良いでしょう。

でも、これを聴いて「つまらない」と思う人も少なくないはず。ロッシェニの歌曲やシューベルトのリートと比べれば確かに物足りません。旋律主体の短い曲ばかりで、伴奏も単純だからです。でも作曲された 1805~9 年は近代イタリア歌曲の黎明期。19 世紀初頭のイタリア歌曲の空白を埋めるもの、と評価すべきです。

問題は、印刷譜に伴奏が「ピアノまたはハープ」とあることからこの録音にハープを選択したこと。フォルテピアノの伴奏ならもっと声とのバランスが良く、歌曲としての位置付けも明確になったのでは？ いろんな意味で「マニア向け」ですが、ロッシェニと出会う前にコルブランが作曲した歌曲集、というだけで聴く価値はあります。

## ▼新譜：藤原歌劇団のロッシェニ CD▼

去る 2 月 2 日、藤原歌劇団《オリイ [オリイ] 伯爵》2 日目の公演を観てきました。オリイ初役のシラゲーザは、いつもながらの高音の冴えと遊び心で楽しませてくれました。全体の感想はさておき、ここではロビーで販売されていた藤原歌劇団のロッシェニ CD について記しておきましょう。

アルバムのタイトルは「超絶 ロッシェニオペラの魅力 Bravi! Vol.2」。ピアノ伴奏によるアリア集で 11 曲が収録されています。歌手は佐藤美枝子さんや高橋薫子さんなどオペラ・ファンにお馴染みの顔ぶれ&藤原の若手。いまだきピアノ伴奏でロッシェニのアリア集の CD 作るかな……とは思いますが、経費がかかるから仕方ないのでしょう。筆者はまだ購入していませんので、次に基本情報を転記しておきます。

### ◎「超絶 ロッシェニオペラの魅力 Bravi! Vol.2」

徳間ジャパン TKCA-74027 (CD)

『セビリアの理髪師』より 町の何でも屋に道を空ける バリトン：森口賢二  
『セビリアの理髪師』より 今の歌声は ソプラノ：高橋薫子  
『湖の女』より ああ、死なせてくれ メゾ・ソプラノ：森山京子  
『ラ・チェネレントラ』より 娘のうちのどちらでも バス：久保田真澄  
『ラ・チェネレントラ』より きっと捜し出してみせる テノール：小山陽二郎  
『ラ・チェネレントラ』より 悲しみと涙に生まれ メゾ・ソプラノ：向野由美子  
『ギョーム・テル』より 動くんじゃないぞ バリトン：柴山昌宣  
『どろぼうかさざぎ』より ああ、私からと言ってこの指輪を ソプラノ：高橋薫子/メゾ・ソプラノ：但馬由香  
『オリイ伯爵』より 悲しみの餌食となり ソプラノ：佐藤美枝子  
『オリイ伯爵』より ああ、どれほどの敬愛を ソプラノ：光岡暁恵/テノール：中井亮一  
『デメートリオとポリーピオ』より いかに安らぎを求めよう？ バリトン：岡山廣幸  
ピアノ伴奏：藤原藍子/浅野菜生子/高橋裕子/呉恵珠  
詳細はこちら→ <http://www.jof.or.jp/news/20140118.html>



(2014 年 2 月 5 日 水谷彰良)





## ◆ガゼッタ第 54 号◆

ガゼッタ第 54 号をお届けします。

本号は、「2 月例会の来場御礼と 3 月例会の告知」、「《オリー伯爵》の従来版と批判校訂版の違い」をお届けします。

### ▼2 月例会の来場御礼と 3 月例会（3 月 21 日）の告知▼

去る 2 月 11 日（火・祝）、今年最初の例会「パリにおけるロッシェニ作品の受容とオペラ・コミック《セビーリヤの理髪師》映画版」（講師：水谷彰良）を実施し、43 名のご来場をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

そこではイタリアの研究者が数年前に発見した《ランスへの旅》フィナーレのリーベンスコフの歌の原曲も初紹介しましたが、詳細は後日メルマガで明らかにしたいと思います。当日の配布資料も、後日 HP に PDF 版で掲載させていただきます。

次回例会は 3 月 21 日（金・祝）、次のとおり開催いたします

日時：2014 年 3 月 21 日（金・祝）午後 1 時 30 分開始、午後 5 時終了予定

会場：北沢タウンホール 3F ミーティングルーム（定員 72 名。下北沢駅より徒歩 4 分）

会員ならびにそのお連れの方は無料。その他の方は当日 1,000 円を頂戴します。

講演：ロッシェニ《オテッロ》の変遷—1816 年ナポリ初演から 2012 年チューリヒ歌劇場まで

講師：水谷彰良

内容：

1816 年にナポリで初演されたロッシェニの《オテッロ》は、その後ハッピーエンド改作版が作られ、女性歌手が男装してオテッロを演じるなど、さまざまな形態での上演が行われました。そして 1890 年にいったん演目を外れ、1954 年に復活を遂げて現在に至っています。講演では約 2 世紀に及ぶ《オテッロ》の変遷を、19 世紀の視覚資料（舞台図、衣装、台本、楽譜）、20 世紀の上演例（1980 年パレルモと 1988 年ペーザロ ROF）、21 世紀の上演例（2007 年ペーザロと 2012 年チューリヒ）を通じて明らかにし、併せて 2012 年バルトリ主演のチューリヒ歌劇場上演の録画をダイジェストでご覧いただきます。（講師・記）

続く 4 月の例会は、講師にドニゼッティ研究の高橋和恵さんをお迎えし、「ガエターノ・ドニゼッティのオペラ《劇場界の都合・不都合》とロッシェニ」と題して実施します（4 月 27 日、会場は上記ミーティングルーム）。

### ▼《オリー伯爵》の従来版と批判校訂版の違い▼

先日藤原歌劇団が上演した《オリー伯爵》……同歌劇団は邦題に《オリイ伯爵》、字幕に「オリイ伯爵」を使っていた（笑）……をご覧くださいの方も多と思います。そこで使われたエディションは従来版（リコルディ版）で、それはそれで問題ありませんが、これとは別に批判校訂版も存在しています。これはペーレンライター社によるエディションで未出版ですが、2011 年 1 月 23 日にチューリヒ歌劇場で初使用されました。

実は 2012 年 9 月、その校訂者ダミアン・コラス（Damien Colas）がプライベートに初来日し、拙宅にお招きしました。その際、筆者が事前入手しておいた《オリー伯爵》の批判校訂版に関する資料について話したのですが、コラス氏から「その資料はフィリップ・ゴセットの名前で発表されたが、大半は私が書いた。」「チューリヒ歌劇場は私の批判校訂版を使用しながら、肝心なところを従来版に戻した。だから批判校訂版による世界初演はまだ行われていない。日本で上演する団体はないだろうか？」と言われ、びっくりしました。

私は「日本でフランス語の《オリー伯爵》を上演するのは難しい。新国立劇場でも無理だろう」と答えました……これは藤原歌劇団が《オリー伯爵》の上演を発表する前の話です。

では、批判校訂版は従来版とどこが違う、なぜ批判校訂版を使用したチューリヒ歌劇場が「肝心なところ」を採用しなかったのでしょうか。

簡単に説明すれば、《オリー伯爵》は半分の楽曲が《ランスへの旅》から改作転用されたため、《オリー伯爵》としてのまとまった自筆楽譜は存在しません。それゆえ近代の上演は、正式な著作権を持つパリのトルブナ社が初演年に出版した総譜とピアノ伴奏譜をベースに、その誤謬を修正する形で行ってきました。リコルディ社は 19 世紀にイタリア語ヴァージョンを出版しましたが、現在のリコルディ版（フランス語版。貸譜のみ）は、ロッシェニ財団との関係で成立した新版で、19 世紀のイタリア語版と異なるものの、原本はトルブナ版です。

これに対しコラス氏が作成した批判校訂版は、従来の素材とは別にパリ・オペラ座のアーカイヴに残された最初期の演奏素材に立脚しています。その検証で明らかになったのは、パリ・オペラ座の写譜とトルブナ版との間に多数の異同があることでした。重大な違いに、現在の第 1 幕フィナーレ（N.5 フィナル）のソリストが 7 人であるのに対し、初期の写譜で 13 人のソリストが歌うことになっていた点が挙げられます（原曲《ランスへの旅》の 14



クチャー&コンサート」を行っており、現代音楽愛好家にはつとに知られた存在です。

2014年3月5日、19時より。会場はイタリア文化会館アニェッリホール。歌ものはマンゾーニ作品だけで他は器楽曲ですが、次の作品が演奏されます。

- ・シルヴィア・コルダ：《時の3つのポートレート》トイ・ピアノ、トイ・ブサルテリーのための（2013）
- ・フランコ・ドナトーニ：《チェ》チューバのための（1997）
- ・フランチェスコ・フィリディ：《狂気の練習 I》風船を演奏する4奏者のための（2012）
- ・ジャコモ・マンゾーニ：《古今集による6つの歌》女声、エレクトロニクス、MIDIキーボードのための（2008）
- ・ルイジ・ノーノ：《ピエールに。青い沈黙、不穏》コントラバス・フルート、コントラバス・クラリネット、ライブ・エレクトロニクスのための（1985）
- ・ルイジ・ノーノ：《ジェルジ・クルタークへのオマージュ》コントラルト、フルート、クラリネット、チューバ、ライブ・エレクトロニクスのための（1983-86）
- ・マウリツィオ・ピサーティ：《S》テナー・サクソフォンとライブ・エレクトロニクスのための（1995）

詳細は次のサイトでご確認ください。

[http://www.iictokyo.esteri.it/IIC\\_Tokyo/webform/SchedaEvento.aspx?id=579](http://www.iictokyo.esteri.it/IIC_Tokyo/webform/SchedaEvento.aspx?id=579)

筆者は観に行きます。現代音楽に関心のある方はどうぞ。

チケット：全席自由 前売り 2,000円、当日 2,500円 予約、お問い合わせは東京現音計画事務局にて。

チケットオンライン：<http://www.purple.dti.ne.jp/nava/tickets/>

#### ▼「マリーナ・コンパラートを迎えて」メルマガ読者への限定割引のご案内▼

本メルマガ第47号でご案内した演奏会「マリーナ・コンパラートを迎えて（朝岡聡プロデュースの演奏会）」への日本ロッシェニ協会会員割引はすでに申込み期限を過ぎていますが、プロデューサーの朝岡聡さんから、このメルマガ読者限定で追加割引のお話をいただきました。

期日：2014年3月18日（火）19時開演

場所：ヤマハホール（銀座ヤマハ7階）

出演：マリーナ・コンパラート（Ms）、中井亮一（T）、須藤慎吾（Br）、渡辺睦樹（エレクトーン）、朝岡聡（コンサート・ソムリエ）

チケット：全席指定 前売 7,000円 当日 7,500円 ペア券 13,000円（前売のみ）のところ、単独券1割引き（6,300円）、ペア券500円引き（12,500円）でご覧いただけますが、日本ロッシェニ協会 HP (<http://societarossiniana.jp/>) 右上「お問い合わせ CONTACT」を通じてのメール申込み限定、締切りを2月28日午前6時とさせていただきます。

『ロッシェニアーナ』第34号の編集で忙しくしておりましたので、本日はこれにて失礼します。メルマガ次号では、新譜「グレットリ《ギヨーム・テル》世界初録音」「ロッシェニ《オリー伯爵》DVD」「ロッシェニ二序曲全集第4集」を紹介させていただきます。

（2014年2月25日 水谷彰良）